



Title	精神障害者の社会復帰の道のりと「共同作業所」の活動について
Author(s)	荒賀, 文子; 野田, 美紗子
Citation	大阪公衆衛生. 1989, 55, p. 14-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

精神障害者の社会復帰の道のりと 「共同作業所」の活動について

大阪府立公衆衛生研究所 荒賀文子

大阪府豊中保健所 野田美紗子

昨年精神衛生法が精神保健法に改正され、「社会復帰」が初めて法文化されました。これを機に、精神障害者の社会復帰の制度化が押し進められるものと考えます。

ところで、精神障害者と呼ばれるようになった青年が、社会で生きていくのは本当に大変なことです。この病気は、青年期に発病し、入退院をくりかえして慢性の経過をたどりやすいのです。そのため友人や学校・職場など社会との関係が中断しがちで、病気になったことで、新たに生活上の問題が起ってきます。就労の訓練の場もなく、社会の偏見を前にして、「せめてあたり前に暮らすことができれば」というのが本人や家族の切なる望みでした。

このような望みに少しでも対応できるよう、保健所、病院、関係団体などの試みが各地で行われてきました。この社会復帰の方向は、かつては「就労して自立していくこと」でしたが、現在は、「働ける人には働く場を、働けなくても社会参加を」の方向になりつつあります。そのためには地域社会での受け皿づくり、つまり住まいと仕事と楽しみと、といった幅広い多様なメニューが求められるようになってきています。

その代表的なメニューが大阪府下のあちこちで作られている共同作業所です。この共同作業所は、地域家族会が保健所の援助によって設立運営しているものがほとんどです。これらすべてがすぐに制度化される現状ではあ

りません。まだまだ本人や家族や関係者の手づくりで、地域社会の中に小さな火を燃やし続けなくてははいけません。

次にこのような手づくりの活動に参加しながら、社会復帰の道を歩み始めているA君の体験記を紹介します。

A君は今年29歳の男性で、21歳で発病し、入院歴1回、現在通院服薬しながら次の職場を探しています。この体験記は、A君が精神障害者の体験発表の機会を得た時、まとめたものの一部です。A君の了解を得てここに掲載しましたが、障害者自らが、体験発表できる時代にやっとなりました。

A君の体験記

7年前、新聞配達員として住み込みで働いていた時に、日常生活のリズムを崩して急に仕事ができなくなり、新聞の入れ忘れや、ハレまちがいが多くなりました。仕事なかまから文句、お客から苦情の出る毎日となりました。自分の部屋で独りでもっている時間が増えました。

そのうち全宇宙の引力の音が聞こえ、宇宙人が日本語で話しかけてきたのです。しかし現実には誰も言うてなかったのです。それが私の幻聴の始まりでした。幻聴が消えず苦しんでいた私の所へ、おどろいた母と兄がやってきて、昭和56年12月入院しました。

入院当初は院内のテレビの音や人の声が気になって、一日中布団をかぶって寝ていまし

た。同時に、食事と共に薬を吐いてしまうため点滴を受けるまでになり、非常に苦しい状態でした。

退院したものの、働けるとは思わなかったし、病気をもちながら通える場所を知らなかったので、3ヶ月間は家で寝てばかりいました。昭和57年9月に母と一緒に保健所に相談に行き、保健所のグループワーク「もくよう会」と、家族会がつくった共同作業所「みとい製作所」を紹介してもらい、すぐに通い始めました。

「もくよう会」へ行く日と通院日以外は、日「みとい製作所」へ通いました。毎日通所するのは体はつらいけれど、働ける場所がある喜びの方が大きなものでした。そのうちに、薬の副作用のためか硬直していた手足も徐々にほぐれ、器用になってきました。

作業の準備や電話の対応、流れ作業の人の配置とその組み替えなど、いろいろな仕事をこなしていくうちに、社会復帰の希望が湧いてきて、一般企業でやってみようという気になりました。「みとい製作所」に通いだしてちょうど1年たっていました。

昭和58年11月、椅子の製造と冷蔵庫の組立をする会社へパートで雇ってもらいました。2ヶ月半がんばった頃、学歴コンプレックスからくる妄想が出てきました。毎日すべての新聞を読もうと努力したため疲れてしまい、仕事場での集中力が落ちてきました。保健所に相談に行ったところ、「みといでもう一度訓練した方がよい」と言われ、自分もそう思ったので、その会社をやめて、59年4月「みとい」へ戻りました。

昭和62年12月「職親」であった旅館へパートで雇ってもらいました。ここでは毎朝5時におきて出勤しました。女性の多い職場だったので、思ったことも満足に言えない状態でした。うまくサボレと言われていましたので、サボらなければならないと思ったところ、まじめに仕事をする時と、サボル時との落差が大き

くでできました。そのため社長さんの娘さんに注意されたことを、「クビ」だと勘違いしてしまいました。それで自分から旅館を辞めてしまったのです。

今度は男性の多い職場を選び、運送会社のアルバイトに行きはじめました。話相手になってくれる人もでき、気持ちも徐々になんできました。そして私にもアダ名がつけられました。「雁之助」です。いつもボーっとしていて、腹も出てるし、TシャツにGパン、傘を持っているといかにも「山下 清」そっくりだったからです。「雁之助」と呼ばれるようになってからは、職場が楽しくなりました。

8ヶ月位勤めた頃から、この会社では正規社員としての雇用のメドもないため、どこか社会保険のあるところを探そうとまた職安に行き始めました。ここでまた、私の十八番のチョンボが出ました。

初めの2回は別の理由をつけて仕事を休み、職安へ行きましたが、3度目に「この頃よく休むがなんでや」と上司に問いつめられ、「職安に行くので休ませてください」と言ってしまう、「1週間後にクビ」と言われてしまいました。

この話を保健所や作業所で皆にすると、なかまに笑われてしまいましたが、そのおかげで気持ちは逆にずいぶん楽になりました。落ちこまずに済んだのは、みんなの暖かい笑いのおかげだと思っています。

「みとい製作所」とは

A君をこのようにはぐくみ、社会復帰していく場と環境を提供したのは、保健所を軸とした社会復帰活動です。A君の居住する豊能地区は大阪府西北部に位置し、豊中市、池田市、箕面市を含む地域です。ここでは10余年、精神障害者の社会復帰への援助を、豊中保健所と池田保健所・箕面支所の共同事業として取り組んできました。

「みとい製作所」は、この共同事業の取り組みの中で、家族が出資金をつのって昭和57年2月に設立し、運営してきた共同作業所です。保健所では、精神障害者のグループワークと、それに参加している家族のための「家族懇談会」が行われています。

「家族懇談会」では、社会復帰していくための訓練する場がほしい、といった家族の願いが根強くありました。そして家族で仮住まいしながら作業を継続させていました。

作業所設立には保健所が援助を行いました。この家族が中心になり、懇談会参加の家族へ呼びかけて、出資金を集めました。この出資金をもとに、工場を借りて出発したのが「みとい製作所」です。

「みとい」の「み」は箕面市、「と」は豊中市、「い」は池田市を示しています。この三字には、3市の障害者や家族の“地域の根城”にしていきたいといった、発足時の思いがこめられています。運営資金は、昭和56年度から大阪府で発足した「社会生活適応訓練事業」の適用を受けました。その後61年5月には、第2の作業所「みとい会池田作業所」を設立しています。

「みとい製作所」、「池田作業所」の利用は、原則として保健所のグループワークに定着できた者となりました。そして社会復帰の到達度のちがいによって、グループワークのみの参加、グループワークと作業所の参加、作業所のみの参加、さらには就労者を中心に構成されているグループワークの同窓会への参加といったように、多様化しています。

この体制は、後から入ったメンバーが、先を歩くなかまの姿を自らの現実の目標としてとらえることを容易にさせているようです。

A君にとっての「みとい製作所」

ところでA君は保健所のグループワークに参加し、その後「みとい製作所」に通所する

ようになりました。4年6ヵ月の通所中にチーフに選ばれ、アルバイトや「社適」の事業所を経て、数ヵ所パートで働き、現在は「同窓会」に参加しながら求職中です。仕事につまづくたびに病状が不安定になり、家にとじこもってきました。

21歳で発病し、仕事も学校も中断せざるをえなかったA君にとって、毎日通所できる「みとい」は社会とのつながりをもつことができる唯一の場であり、その場には、自分とおなじ体験をもっているなかまがいました。指導員を含めての「みとい」の人間関係は、A君を人として認め、孤独から救ってくれしななかまの生きざまは、A君のこれから生きていく方向を示してくれました。

また自分の失敗を笑って披露できる保健所の相談員は、きまじめで融通のきかないA君にとって、身近な人としてのモデルになる一方、病気が悪化して家にとじこもった時、仕事につまづいた時など最良の援助者でした。

以上のように、「みとい製作所」を含むこの地域の社会復帰活動は、A君をはぐくんでいきました。A君はまだまだ社会復帰途上にあります。これからも仕事との葛藤は続くと思います。

A君を支えていくには、きめ細やかな対応が必要です。共同作業所は、保健所の社会復帰活動と連携することで、より機能していきます。今後さらに、一人でも多くのA君が育っていくことを願っています。